

解説特集のことば

解説特集「レジリエントな学びを支える実践的取り組み -学びを止めない支援-

瀬田 和久
(学会誌編集委員会委員長)

村上 正行
(学会誌編集委員会副委員長)

後藤田 中
(学会誌編集委員会幹事)

山元 翔
(学会誌編集委員会幹事補佐)

2020年10月末現在、新型コロナウイルスの感染状況は、欧米の諸外国に比べ比較的抑え込まれているとされ、経済活動の活性化に政策の舵が切れつつある。一方、感染リスクが低減した訳ではないため、教育現場での試行錯誤は今なお続いている。こうした状況が長く続くことでの社会全体の疲弊も進みつつあるが、「すべてのヒトがこの難局を乗り越え、学びを持続できるよういかに支援するか？」に向き合う実践的知見も見受けられるようになっている。

本号では前号に続く解説特集の第二弾として、特別支援教育、アスリート（パラアスリート含む）、学校外での支援の現場で課題解決に取り組む3名の先生方に解説記事をご執筆頂いた。

まず、小川氏らの『インクルーシブ教育の観点に基づくオンライン教育の可能性』では、特別支援教育を特別の場で行う“特殊教育”的な観点で捉えるのではなく、そこでのオンライン教育の実践知がインクルーシブ教育システムの構築に向け有意義な示唆を与える立場から解説頂いた。米国の先進的なインクルーシブ教育の思想とカリキュラムをベースとして、日本の様々な特別支援学級におけるオンライン教育に関する取り組みをご紹介頂いている。オンライン教育をコロナ禍の緊急措置という理解に留めず、共生社会実現の観点から、一人ひとりの学びへのアクセスを保障する有力な手段として位置づける視座を提示し、それをより充実させるためのシステム開発と実践研究の可能性

を示している。

続いて、奥野氏らの『競技スポーツにおけるオンラインを活用した心理サポート事例』では、東京2020大会の延期によりアスリートに生じた「心に痛みを伴う強い情動反応」をケアするために、オンラインを活用して実践された心理サポートについて、日本陸上競技連盟および日本パラリンピック委員会での対応を例に解説頂いた。心理学、臨床心理学、スポーツ心理学、精神医学といった学問的基盤と科学的根拠に基づいて、とりわけ、心理的課題にじっくり取り組んでいくためには、どのような環境下で実施されるかが大きく影響するという理解に根ざした先導的取り組みをご紹介頂いている。心理サポートは、決して「弱いアスリート」を対象にする例外的なものではないと著者が述べているように、教育現場における様々な個の心理的な不安を理解し、学びに目を向けていく支援を展開するための具体的かつ汎用的知見を与えている。課題として述べられている非言語情報を含めたオンラインコミュニケーションをいかに促進するか？は、本会会員が貢献できる重要な技術課題とも思われる。

そして、山野氏らの『見えない貧困、子ども虐待などを背景にした子どもへの支援システム作り：スクリーニングの可能性』では、見えない貧困、児童虐待などを背景にした子どもへの支援システム構築について解説頂いた。問題の徴候をいち早く掴み支援へとつなぐ仕組みを内包する社会システムの構築を目指してい

る。すべてのヒトが学びを止めないSDGsを実現するためには、それを支える持続可能な支援システムの実現が極めて重要であることを再認識させるものである。ありがちな「べき論」から離れ、現場の実態を踏まえた具体的な意志決定項目、手順、時期、情報の粒度、環境変化への対応を、様々なステークホルダの所掌、権限の理解に基づいて現場で実行可能なスクリーニングガイドに落とし込む方法論は、他職種協働と品質担保の素地の形成と頑健な社会システム構築モデルとして参考になろう。場当たりの対応にならず、かつ、今「出来ることから」という、今まさに様々な場面で求められるが両立が難しい2つの指針を満足する実践モデルとしても先進的である。

これらの解説が「持続可能な社会の創り手」の育成が社会的に強調されている点からも本会会員にとって

有益な解説記事となれば幸いである。

なお、本号についても、教育現場の状況を鑑み、2020年11月にドラフト版を学会Webにおいてアクセス制限を設けず一般向けに無償公開した⁽¹⁾。本号に掲載している正式版の解説についても、J-Stage上で一般向けに公開しているため、会員ではない教育関係者にも広く周知いただければ幸いである。

最後に、11月のドラフト版の無償公開に向けて極めてタイトな日程の中で、緊急企画の主旨にご賛同頂き、タイトな出版スケジュールを厳守して下さった執筆者のみなさまに改めて謝意を表す。

参考文献

(1) <https://www.jsise.org> (参照 2020.11.01)